漢墓に於ける副葬銅鏡と地域差に関する一考察(その1-2)

~洛陽焼溝漢墓及び広州漢墓の報告書より~

第一章 洛陽焼溝漢墓に関して~2

2、洛陽焼溝漢基 報告書概要 (報告書筆者訳とその他関連事項を含む)

1) 遺跡位置及び墓区

「洛陽焼溝漢墓」は、洛陽市の西北約三華里(約1,5km)、邙山の南麓、隴海鉄道を南に望み北に向かって徐々に高くなっていく北邙台地の層上にある。

因みに邙山の頂上には、現在唐代の上清宮旧址と伝えられる一古寺が残存している。

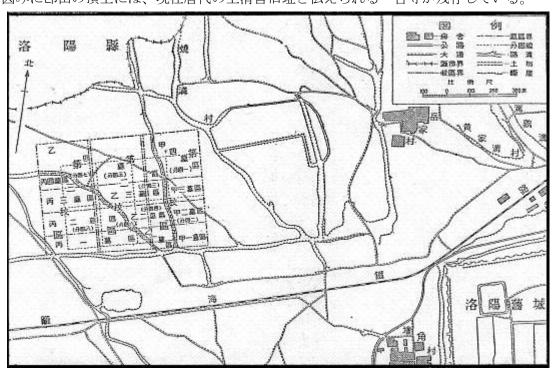


図8 洛陽市北郊焼溝漢墓区位置図

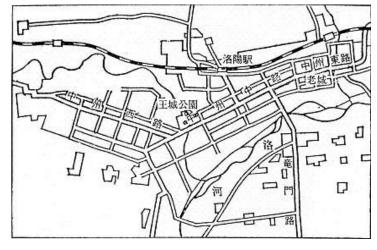


図9 洛陽略図

中国の諸都市より

「洛陽焼溝漢墓」報告書より

(ここで「洛陽市の西北約 三華里(約1,5km)」と言う のは、図8によるとどうも 「洛陽旧城」を基準にして いるようであり、又図9に よると「老城」に相当する と思われるが、その「洛陽 旧城」とは何時の時代の城 壁を指しているのだろうか。 現在の洛陽市は・・・・・ 『図1現在の洛陽市街図』・『図9洛陽略図』に見る如く、1948年に洛陽が解放されて以来、機械工業を主とした工業都市へと変身した。工業建設の発展に伴って、洛陽市は大規模な市政建設が進められ、市街地の姿も大いに変貌した。現在、全市は澗西区、西工区、老城区、瀍河区、吉利区、郊外区と六つの区に分けられ、その内、澗西区は完全に解放後発展した工業区である。西工区は隋と唐の旧城の所在地であり、洛陽の新旧町の間にあり、全市の政治、経済、交通の中心地である。老城区は元代以降の河南府城であり、街道は狭いが商業が繁盛し、地方工業も比較的集中している。という事で報告書に言う「洛陽旧城」とは老城区に相当する所であり、元代以降の河南府城址のようである[註8]。

しかし『中国古代の城郭都市と地域支配』・[註 24・p 197]に依ると「大清一統志」巻 262、河南府条にみえる陽渠の項に、「洛陽県(現洛陽市の中心老城のことで、金の時代に造られた)の東に在り。・・・」との注があり、そうであれば一時代前の金代のものと言える。

この邙山の南面には多年にわたっての古くて深い溝が縦走し、崖により一段一段自然区画された棚田状の地形となっている。その中で、比較的大きな"焼溝"と呼ばれる溝の西の棚田を便宜上"焼溝区"と名付け、そこに3つの学校が建てられる事になり、事前に発掘調査がなされた。この約275,200㎡の学校区内には、3条の南北・南西に縦横断する溝がある。この土地を東から"甲""乙""丙"と等分の3学区に区画し、更に其々南北方向にその自然の溝に合わせて、南から第一墓区、第二墓区、第三墓区、第四墓区と4区画し合計12墓区に分け発掘調査された。(図8)

2) **基葬分布** (表 A-1A、表 B-1A 参照)

「洛陽焼溝漢墓」は、前漢中葉から後漢末期までの約300年間の墓地であった。ボーリング調査の結果、1000墓以上の墓があるものと推定されているが、1953年の調査では前漢・後漢代の225墓が発掘され、「洛陽焼溝漢墓報告書」(以後[註1]と言う)が1959年刊行されている。表 A-1A、表 B-1Aより墓葬分布を見ると、甲区が約30%、乙区が60%、丙区が10%となっている。最も古い段階の前漢中期の第1期・第2期の墓は甲区のみに集中し、その中で甲四区が最も多く、続いて甲三区、甲二区の順に微減しながら分布している。前漢後期の第3期前期には、一部甲区も継続するが中心は乙区に移り、新・後漢前期・後漢中期の第3期後期・第4期・第5期にかけても乙区が中心となる。乙区では乙二区が第3期後期まで優勢であるが、次第に乙三区に移り後漢後期まで続く。前漢末期・新代には墓数こそ少ないものの一時的に丙区にも出現し、中断を挟み後漢中期・後漢後期へと継続している。丙区はその殆どが丙二区に集中している。第6期の後漢後期になると全区に及んでいるが、中には第1期・甲区の墓を破壊する様に造られているものもある。これは疑いも無く秩序を持って墓葬区が定められ間断なく造墓されていたものが、桓・霊前後からその秩序が崩れ、前漢代の墓区域に僅かではあるが侵入造墓されて

いる。しかし、これらの墓はほぼ時代順に東から西へとその分布を変えていると言える。尚、[註1]には「隋唐洛陽城」の西にあると思われる金谷園の漢墓、第3期前期の1墓が含まれているが、場所が違うと思われるので理解しがたい。(図6)その上、その墓には銅鏡2面が含まれているので分析上影響は大きいと思われる。表二から表六の墓葬形制表によると記載墓数は223墓であるが、その内38B,59B,1004B,1028Bは、其々のAの分室とし、墓型の識別出来るものを219墓としている。それに表六十七の型式不明6墓を加え,墓の総数は225墓として報告されている。

一方発掘経過の説明では発掘第 1 期は、"甲三区"・"乙一区"・"乙二区"・"乙三区"及び "甲二区"の北半部の範囲合わせて 137 墓、発掘第 2 期は "甲一区"・"甲四区"・"丙二区" "丙三区"及び "甲二区"の南部の 88 墓、合計 225 墓と書かれているが、表 A-1A の集計に依ると第 1 期の範囲で 148+ "甲二区"の北半部(13 墓の内なにがしか)であり、第 2 期の範囲では 59+ "甲二区"の南半部(13 墓の内なにがしか)で、記されていない "乙四区"の 3 墓、"丙一区"の 1 墓、"金谷園"の 1 墓を加えても数字が合わない。

尚、この1952~53年の「焼溝漢墓」に引続き、1953~55年中州路(西工段)・漢河南県城の城壁付近発掘の50基、1954年澗西周山発掘の81基、1955年澗西16工区などの発掘の80基余、1957~58年金谷園・七里河発掘の217基(金谷園126墓、七里河91墓)、1957~58年焼溝などの発掘の約200基のほか、その後の20年間にも若干の発掘が行われ、80年代後半までに発掘された洛陽漢墓は総数900基以上に達している。 その中で最初に報告された「焼溝漢墓」[註1]の墓型、埋葬施設、埋葬方法、副葬品の組み合わせ、器物の種類と変化等による資料の整理・検討による編年基準、及び年代序列は、その後の各遺跡の発掘結果にもかなり類似しており、その信頼性が高く評価された。その中で銅鏡の編年による年代確定は、貨幣(225墓中、銭幣が出土したのは162墓である)や一部の器物に記された紀年銘からの研究と共に、重要な役目を果たした。因みに、これらの墓の埋葬時期は焼溝漢墓とほぼ同時期ではあるが、後漢後期の墓は少なく、前漢墓は金谷園墓区に、後漢墓は七里河墓区に比較的集中している。[註22]

w T	40	ANT - NO	an .	- 04	n I	- Attr	210	To	٠.	400	期前	th skip	_	_	=3	_	-	_	3期後	_		_	3~4	10,	Ť	.,		第4			1			44~			T	_	第5	_	_	_	盛を含	_	_	_
		第1期	_		_		_	2	-				+	T=	_	_	T-	_	_	_	-		_		-	-	-				-	T	_	_	-	_		***		771	v	_	_	_	V	-
	型式	I D	0	1 1		_	I 3	1	_			II O		2		2		П Ф				II (D)						III				II (D)		III (D			?		11		0		2	-	2	1
<u> </u>	八	w	w	8) 6	14	14	- W	9	1	10	14	14	10	16	100	+	1	<u> </u>	(6)	w	(0)	w	6	w	÷	2	0	w	€		-	4	-	-	•		-	Ψ.		-	-	_	-		w_	+
甲一	Z					3	1		1		1																	1															Ц			1
甲二	x	1	2		200	5		1			3																																			
					93	3			T	T	1	T	T	T	T	Г	Г																											1		Ī
三国	2	5	3	+	-8	3	100	2	+	180	100	+	+	+	+	+	+	\vdash		-		-	-	+	+	-	-	-	-		\dashv	+	\rightarrow	+	-	-	+	-	\vdash	-	\dashv	1	\vdash	SEL	SHEW	a
甲四	X	12	2	2	1	5	1	3		1	1			1																															3	
区		18	7	2	1 1	6	1	3 1		1	5			2											_			1			\Box						\Box				_	1	\Box	1	3	3
	区										1	1	200	2	1			1	1					1																						
<u> </u>	Z				T				Sept.	3 2	5	4		9			2	3	8	1			7	1	1	1	1						1													
ZΞ				1	T	1	T	T	T				1	T			Ť			3	1			2	1			9	4	2	1			4	2	7	1	2	3	3			1	1		
	_		\vdash	+	$^{+}$	+	+	$^{+}$	+	198	F 100	1400	-	t	1000	1	t			200				-	7	1		0.00	120.04	-	1	1	\exists	,	-	00080	1	215	SISMO							9000
2,00	区							L					L																			1						- }						1	2	-
CIX	計					I	\perp	I	I	3 2	7	6	2 1	1	7	4	2	4	13	4	1		7	4	1	1	1	3	4	2	1		1	4	2	7	1	2	3	3			1	2	2	2
9 —	X																									1												1								
有二	×					1		T				1	T	T	1000	3	1				2000							2		1				1		2					2			1	3	3
丙三	EX.			1	T	1		T	T			1	T																	2									1	1					2	N. Chillian
NO9	00.0			1	Ť	T	T	T	1	Ť	T	Ť	T	T		T	T								1																					1
NIZ.		_		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+		3	1				7				7	7		2		3	\forall	1	7	1		2	1	1		1	2			1	5	5
2谷				+	+	+	+	+	$^{+}$	1	É	1	+	1		1	۳	\vdash						\neg	7								\neg				\neg		\Box		7		\Box			-
各期		18	7	2	1	6	1	6 1	+	4 3			2 1	2	7	7	3	1	13	4	1		7	4	1	- 1	1	6	4	5	1	0	1	5	2	9	1	2	4	4	2	1	1	4	10	ď

表 A-1A 墓区・墓型式・墓数と編年一覧表

中国時代区分	132 118 110 87 74 8 1 1 1 1 1 1 1 1 1	後期 帝 成帝	7 1 9 新	学 光武帝	前 期 明帝 章等	ê	後 漢 中期	相帝	後其	189 220
皇 帝 名	中期 武帝 昭帝 宣 期 第3期 後半 2期 高後期 前漢中則	期 前	哀 平 王莉 第4期 3期	学 光武帝	明帝 章帝		中期	超奇		Я
皇帝名 始皇 高祖 京和 文帝 景帝 景帝 京和 以州 (京和 京和 京和 京和 京和 京和 京和 京和	武帝 昭帝 宣 明 第3期 後半 2期 国後期 前漢中則	期 前	第4期 3期	光武帝	明帝 章帝			相密		74
乗競 岡村福年 第1期 1別	期 第3期 後半 2期 前漢中則 第1期 第2期	349 A	第4期 3期			和帝 屬・	安帝 順帝・	相密		
	後半 2期 回後期 前漢中期 第1期 第2期	101 A	3期	1	第5地			100.10	豊帝	献帝
広州漢藍 時代区分 秦横南・南越王国前期 南越 施濮漢藍 編年 ・	国後期 前漢中期 第1期 第2期						第6期		; 9	有7期
先課漢基 編年 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	第1期 第2期				圳			5期		
 意区 甲一 甲二 甲三 甲四 水計 乙二 乙二 乙二 乙二 乙二 乙二 丙三 丙二 丙三 	No. of Street	第3期前			裏前期			英後期		
 基 区 甲 一 甲 二 甲 三 甲 四 甲区 小計 乙 二 乙 三 乙 三 乙 四 乙 四 즈 四 丙 三 丙 三 丙 三 丙 三 	前漢中期			期後期	第4期		第5期		第6其	-
甲 一 甲 二 甲 三 甲 四 甲 区 小計 乙 一 乙 二 乙 三 乙 三 乙 三 乙 四 乙 区 小計 丙 一 丙 二		前漢後	期 新・	後漢初	後漢前期	1	後漢中期		後漢後	期
甲 一 甲 二 甲 三 甲 四 甲区 小計 乙 一 乙 二 乙 三 乙 三 乙 四 乙 四 乙 四 乙 四 丙 一 丙 二 丙 三										
甲 二 甲 三 甲 四 甲 区 小計 乙 一 乙 二 乙 三 乙 三 乙 四 乙 四 丙 一 丙 二 丙 三			- 5	基数・築造時	学期 編年					各区計
甲 三 甲 四 甲 区 小計 乙 二 乙 三 乙 三 乙 四 乙 区 小計 丙 一 丙 二 丙 三	. 5	1			1					7
甲 四 甲区 小計 乙 一 乙 二 乙 三 乙 四 乙区 小計 丙 一 丙 二 丙 三	1 1 2 5	1 4	1							14
甲区 小計	5 3 5							1	1	15
乙 — 乙 二 乙 三 乙 三 乙 四 乙	12 5 8	2	1						3	31
乙二 乙三 乙四 乙四 不針 丙 一 丙 二 丙 三	18 10 23	1 7	2		1			1	4	67
乙二 乙三 乙四 乙四 不針 丙 一 丙 二 丙 三						-				-
乙 三 乙 四 乙 区 小計 丙 一 丙 二 丙 三		4		2 1		-		-		9
乙 四 乙		31	15 13		2		_	,		71
乙区 小計 丙 一 丙 二 丙 三	-	4	4 1	7 3	10 1		8	1	1	52
丙 — 丙 二 丙 三	+		21 21	- 10				1	3	3
丙 二 丙 三	+ + -	39	21 22	2 13	12 1	-	8	1	4	135
丙 三		1					1			1
			4		3	3	2		4	16
丙 四					2		1		2	5
										0
丙区 小計			4		5		4		6	22
金谷園1		1								- 1
各期合計		1 47	27 22	0 12	18 18		12	2	14	225

表 B-1A 墓区別・墓数・築造時期 編年表

3) 墓形分類

各形式の特徴の相違は次表の如くである。

発掘された墓葬は225墓。総合的に比較すると墓形そのものの発展のさまは矛盾なく、 規律をもって発見されている。

これらの墓葬は総じて洞室墓と説明できる。墓形の構造は、空心磚墓と小磚墓に分けられると言う建築材料の違いがあるが、墓道と墓室から構成されている。

空心磚墓には"平頂"と"弧頂"、小磚墓には"弧券"、"四面結頂"(穹窿頂)と"横券"がある。各型の墓葬出土物の比較結果から、墓形の発現と器形の変化は概ね一致し、構造形式の違いは顕然と時間の前後に分けられ、経過詳細の分析の後漸く前後の相互連係が明確となり、墓葬形式の中身が一つの系統の単独組織として報告しうる。

上述の各種形式の磚墓は、墓数総数の二分の一にも足りない少数であり、その他の多くは 土壙墓である。但しこの土壙墓には一つの特徴があり、その大部分の開鑿形式は全て磚室 墓に倣っている。この点により二者(土壙と磚室)の壙室輪郭線と出土器物の形式の間は 証明し得るに到った。これら主要特徴を根拠にし、五型・十式に試分した。

型	完	分型標準	分式標準	記	阴	學例	備	Ŧ
	1		墓室較短	放置棺木之後,前端直 餘地,人架前端正當耳		_	不限單棺	變棺。
I	2	平頂 (空心磚墓)	一室較短 一室略長	爲一、三兩式之合葬, 造"。	墓室全層"阿次	Ξ	不限磚室 一為磚室 漿。	
	3		墓室較長	放置棺木之後,前端貿前端當耳室與墓室的	=	不限單桁	楚棺 。	
П	1	(小磚蓋)	無甬道	甬道未產生之前,墓 開口,故墓門與墓頂領 成一直續,故又稱"直	高, 墓頂自前至後	四、五	不限土塘」	ek nih siz
ш	2	(土羰基)	有甬道	甬道產生之後, 墓室 降低,自後至前成一曲 弧頂。		六、七、 八	小阪工族」	以似至。
m	1	單弯盜頂(小碑墓)	翌井式墓道	自前後室分開,前室起 "四面結頂"做法),後 則用弧劵)。		九	以上各式到式。	基道同此
ш	2	(土壙墓)	竖井附階挮墓道	墓室同一式。墓道於" 斜長之階梯墓道。	'竖井'"之前,加一	+		
Г	∇ .	雙穹窿頂(碑室墓) 拋物線頂(土墳墓)	不分式	在三型基礎上,後室办法。土壤墓頂前後做成型墓頂和前後壁成90	文"她物線"。與二	十二、十三、	少數仍用學道。	S 非式基
V	1	前室加寬,成為橫	前後室之間無甬道	前後室關係與三型同, 與嘉道成丁字形。	僅前堂橫度加寬,	十四	少数仍用图道。	2井式蓝
Y	2	室(橫堂),與墓道成丁字形。	無後室,或前後室 之間留成甬道	無後室者,棺木置於前 前後室之間留成甬道, 乘放於前室)。		十五一 十八	墓道多用《 但少數仍治 梯或豎井。	

表一 墓葬型式分類要点説明表

3) -1 墓葬各型式図 (副葬品の訳は略す)

A.第一型墓葬(平頂墓)

1) 一型一式

例一 平頂単棺室空心磚墓

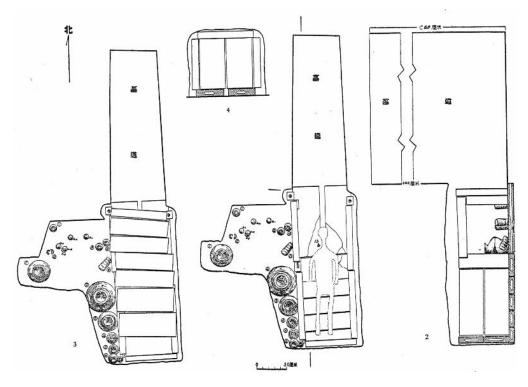


図10 184 号墓 1、平面図 2、西断面図 3、墓室上蓋平面図 4、墓門展開図

墓 184 は第一校区北部、校区北境界より 110m、東境界より 20m、"甲四"区の東北角に当たる。地上面での封土は早くから失われ、墓口は乱された土の下に蓋が被されていた。その土の厚さは約 1,3m。深さは地表面から 6,6m であった。四壁が垂直の長方形竪井の様であった故、"竪井式"墓道と称する。墓室の内は棺を囲うに、空心磚の囲いを築き、上蓋は磚頂。此の種のものは前漢時期の河南省西一帯に大いに流行したやり方に倣っている。磚室の構築は、土壙洞穴を穿った後、墓底に平鋪大磚を敷き、然る後に左、右、後の三壁を大磚で築いている。柱は磚で、この種の磚室は木槨構造に倣い、墓中もまた木槨と同様に作られている。〈中略〉 墓の中には、棺が一口葬られており、棺木は既に腐り、僅かに板灰として残っていた。人骨もまた粉化し、黄色細末になっていたが、取り除いた後注意深く見れば尚、元の位置を見分けることが出来る。形跡の観察によれば四肢は垂直、人頭の前、墓とは僅かに 0.62m、墓室の容積は甚だ小さい。この種の墓室は比較的短い墓葬で、以下の文章での分類上、第一型の第一式と定めた。編年は第2期。

2) 一型二式

例三 平頂両次造空心磚墓

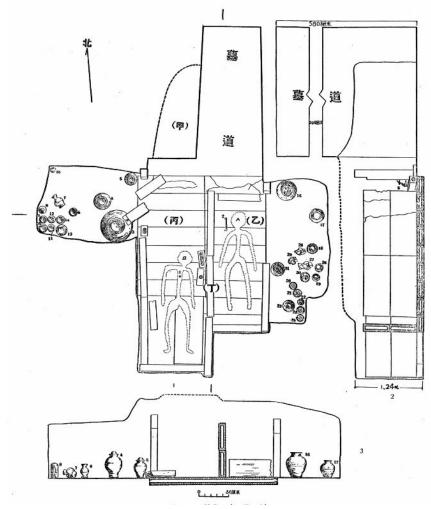


図 1 1 312 号墓

1、平面図

2、西断面図

3、北断面図

墓 312 は墓 2(次頁の一型三式)の南 210m、"甲一"区の西北角に在る。墓室を除き、後部が長短不揃い以外は墓 2 の形制と同じである。この種の磚室は、合葬時改建されている故に"両次墓"と称する。墓道はやはり長方竪井で、深さ 5,8m である。墓内は磚室構造で、その長寛に大小があることによって、二次に亘って改築が成されている。左棺室、右棺室二つの棺室には各々耳室を一つ持っている。両耳室建造もまだ磚は用いられていない。墓中の全事実の観察を根拠にすると、右棺は本来平頂の単棺墓室(図 11、1 の乙)であり、左棺室は後からの合葬時に右棺と同じ墓所に作っている(図 11、1 の丙)。右棺室の一方の壁をやや内側にし、二棺の間に垣を作った(図 11、1 の丁)。この点は墓道左側一面が開鑿された、単独の凹んだ壁(図 11、1 の甲)を根拠に、左棺は後の合葬の証と成せる。

<後略> 編年は第2期。

3) 一型三式

例二 平頂雙棺室空心磚墓

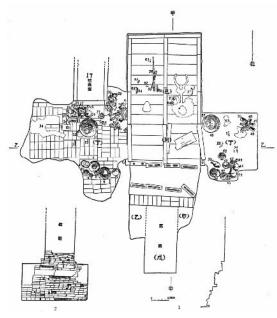


図 1 2 甲 2 号墓 1、平面図 2、封門磚展開図

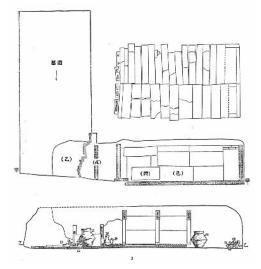


図 1 2 乙 2 号墓 1、墓室上蓋図 2、東断面図 3、南断面図

墓 2 は墓 184 の西南約 120m、"甲三"区の西北に在る。墓葬開鑿の形式は墓 184 に大体似ており、やはり長方竪井墓道,深さ 5,1m の洞穴形墓室である。墓 184 例と違い、一室の内に二つの棺が合併されている。墓室構造はまた空心大磚を用いて築成されている。墓 184と違う処は二つの棺の間に中の垣根が加えられ左右二室に成っている。実際は単棺室が合併されたこの種雙棺磚墓的形式は、頂部に磚の蓋をかける為には二室が寛過ぎて、中間に磚の垣根を加え支持する必要があった。室毎に一つの棺が葬られていたが、既に棺木は朽ち果て、只少量の板灰が残っていた。右棺には漆皮が甚だ厚く残っていた。編年は第 2 期。

B.第二型墓葬(弧頂墓)

1-1) 二型一式

例四 弧頂単棺室小磚券墓

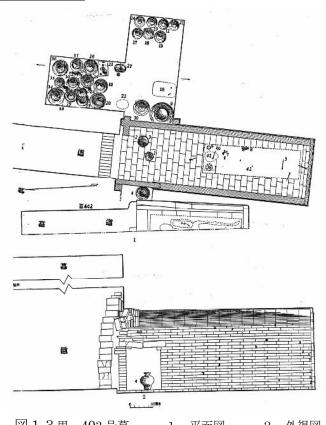


図 1 3 甲 403 号墓

1、平面図

2、外視図

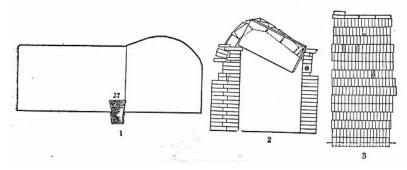


図 1 3 乙 403 号墓 1、東耳室縦断面図 2、墓門展開図 3、封門磚展開図 墓 403 は校区二号溝の東、"甲二"区に属し第一型墓 402 の右側、この二つの墓の距離は 最も離れている所で 0,3m、二墓は概略平行で墓室は南北に向き合っている。 墓道は長方竪井、深さ 6,29m。第一型墓道と大体同じである。

墓室の内は弧形墓頂に開成された後、磚室が作られている。第一型第三式各墓と平面尺度 の基本は同じである。<後略> 編年は第三期。

1-2) 二型一式

例五 弧頂雙棺室小磚券墓

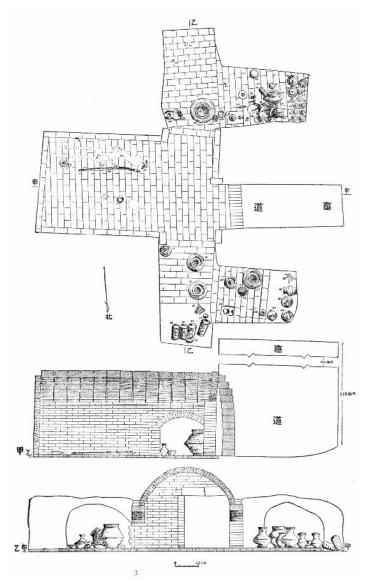


図 1 4 82 号墓 1、平面図 2、南縦断面図 3、西横断面図

墓 82 は第二校区東部 "乙二"区に在る。墓室は東西向き、墓道はやはり長方竪井で深さ7,1m。門を入れば、弧頂雙棺墓室が開成されている。墓室前部の両側に各一の"丁"字形耳室があり、左右の耳室は概略対称である。墓室は全て磚が用いられた造りで、両壁は各々17層の磚で築かれ、磚壁の上は磚頂のアーチで、前後は横並びの13列、但しアーチとなる初めの部分は縦4層である。墓頂は長方形磚と楔形の小磚を順序よく並べている。小磚形制と上述の墓403は同じである。(図中 2,3の断面・甲乙は書き間違いか?)<<後略>編年は第三期。

2-1) 二型二式

例六 弧頂雙棺室小磚券墓 (74号墓-郭忠墓)

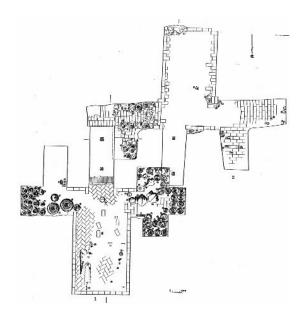


図 1 5 甲 74,74 号墓 1、墓 74 平面図 2、墓 7 5 平面図

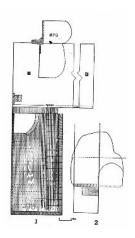


図 1 5 乙 74,74 号墓 1、東縦断面図 2、墓74 (墓道) と墓75 (耳室) 関係断面図

墓74 は上述墓82 の東60m、"乙二"区内に在る。墓室は南北向き、墓道は長方竪井で、深さ7,85m。墓門は墓道底部の一端を開鑿し弧頂を成している。墓門の内は雙棺墓室を鑿ち、墓室前側に凡そ対称に左右耳室があるが、右側耳室は十字形に、左側耳室は丁字形に開成されている。室内は全部磚で築かれ、磚体と築構形制は全て上例と概ね同じであるが、壁上アーチが立ち上がる処、比較的多く縦連券を用いている。<中略> 墓室頂線と前壁線が接する処の形式の違いによって、墓82 は"直線弧頂"、墓74 は"曲線弧頂"と称する。二型一式と二式の違いは、甬道が有るか無いかで分類している。<後略> 編年は第三期。

2-2) 二型二式

例七 弧頂雙棺室空心磚墓

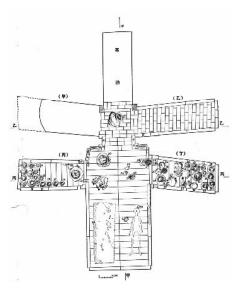


図 1 6 甲 102 号墓 平面図

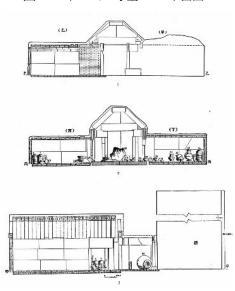
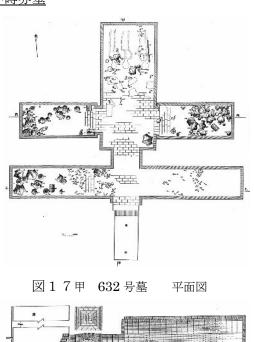


図16乙 102号墓断面 1、南断面 2、北断面 3、西断面

墓 102 と上述二墓は同じ"乙二"区に属し、墓 82、74の南に在り、三者の位置は約鼎足の形をしている。長方竪井式墓道の深さは 8,66m、底端を折り返し内に入れば、雙棺墓室が開成されている。これは上述諸例と同じである。甬道は前例に較べ長大で、甬道の両側に甲乙二つの耳室があり、棺室前側にもまた丙丁二耳室が対称的に開けられている。墓室開鑿と一般弧頂墓室とは異なる処は無いが、ただ弧頂部分が両側に向かって斜めに下り八字形を成し、墓磚建築の要求にも符合する。墓室は均しく空心大磚で築かれているが、ただ構造形式は一型と異なっている。<後略>編年は第3期~4期。

2-3) 二型二式

例八 弧頂三棺室小磚券墓



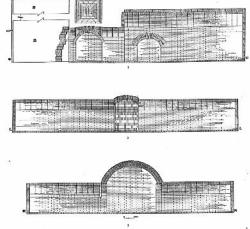


図 1 7 乙 632 号墓断面 1、西縦断面 2、南横断面 3、北横断面

墓 632 は、上述三例の南、"乙一"区に位置する。墓室は南北向き、墓道は墓室の南に在り、墓門は南西に 5 度傾いている。墓道は長方竪井、深さは 9,39m である。

漢墓発掘中では、この墓の開鑿形式は最も特殊なものであった。墓頂上を長さ5m、寛2,2m の八角形の竪穴を、三層にわたり各層毎に左右0,2m ずつ減らして掘り、竪井底部に於いて明らかにアーチの磚室があった。墓室は三棺安置、開鑿も又長大で長さ5,6m、寛2,25m、高さ2,46m あった。両側に二耳室対称に出、その前の甬道にも両側に再び二耳室があった。 耳室は甚だ長大で、平面形式は墓102と概略同じであり、二型二式の分類に収めた。

中室は長た長大で、平面形式は基 102 と概略向しであり、二型二式の分類に収めた。 全墓磚を使用し築かれ、墓頂は後部二耳室の頂上も均しく雙重並列アーチで、漢代墓頂の アーチ法に在り、此の種の構造は多くは見られない。この 225 座漢墓中、雙券弧例(図版 5 墓 52 墓頂構造俯視)が有る。<後略> 編年は第三期。

C、第三型墓葬(単穹窿頂墓)

1) 三型一式

例九 単穹窿頂雙棺室小磚墓

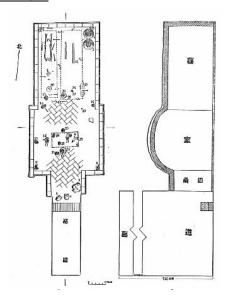


図 1 8 甲 1026 号墓 1、平面図 2、西縦断面図

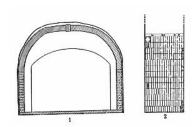
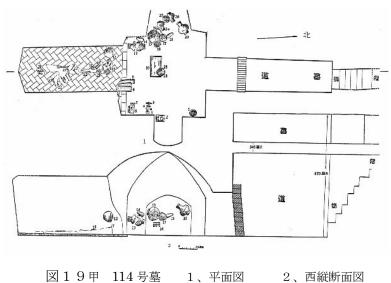


図18乙 1026 号墓 1、北横断面図 2、封門磚展開図

この墓は三号溝の辺沿に接した"乙三"区の最西部から出た。これは三型一式墓葬が分布する中で最も西辺の一個で、墓 74 から東南 215m 離れた所にある。墓道の下、北壁に向けて墓室が開成され、墓道は依然として長 2,40、寛 0,82、深 7,26m の長方竪井で、二型墓道と大体同じである。墓室前半は広い正方を成し後半は長方形の雙棺室で、墓室は整然と前後両部から成る。墓頂部分は、後部が依然として前型の雙棺弧頂墓室の方法を用いる以外、前室の四周磚の壁上は(前後の通路はアーチ)、壁の磚と同じような方法で上に積み上げるが、四面角に移る処に楔磚を用い、四周は段々と内側に合せた天井となる(図版7、3参照)。墓頂平面は対角線上に四つの縫い合わせ状になり(図版8、6参照)、最後に一点に会する。この一点を二つの磚で塞ぎ、"四面結頂"と言われる四角から集まってきた磚の天井となる。此の種の磚の積み上げ形式は特に二型二式の通路の中に現れた(例八 632;図17)。この時から正式に墓室に使用された。後室は依然として二型の形式で使われ、アーチの上の形は以前と同じである(図版8、1を参照)。<後略>編年は第三期~四期。

2) 三型二式

例十 单穹窿頂単棺室土壙墓—竪井墓道附階段(郭躬墓)



2、西縦断面図

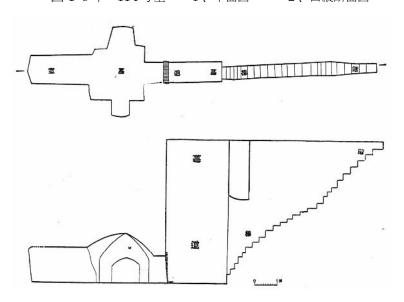


図 1 9 乙 114 号墓 1、平面図 2、西縦断面図

墓114は二号溝と三号溝の中間、"乙三"区の最北部から出た。この墓より二号溝の間が、 三型墓葬が集中して分布する所である。竪井墓道の前の地面には、更に一つの斜めの長い 階段が看える(図版7、1,2)。但しその他の部分の開鑿は上述の墓と基本的には同じで あるが故に墓形分類中第三型の第二式と定めた。<中略> 棺室(後室)の内、死体の前 後に五銖銭73枚、貨泉1枚が散らばって置かれ、胸の前辺り右側に雲雷紋鏡1枚が出た。 頭の右前に銅印が置かれ、"郭躬印信"の篆が有り墓中主人の姓名と知られる。 編年は第五期。

3) 三型一・二式"隔山葬"墓

例十一 単穹窿頂隔山葬墓

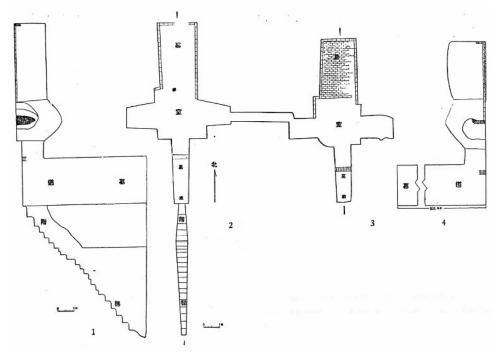


図 2 0 28A,B 号墓

1、墓 28B 東縦断面図 2、3、墓 28B、墓 28A 平面図 4、墓 28A 西縦断面図

隔山葬墓は一型、二型墓の中に均しく出現し(一型墓 156A,B、二型墓 403,402 を参照)、 三型墓中にも両型墓と共に発現している。この墓の他、墓 1009A,B に見る。

墓は"乙三"区北部、東の墓 21 から僅か 15m離れた距離にある。此の一帯のその他三型 墓葬は東西一列を成し、墓 28B と 28A の方向は同じく南西に 4 度傾き左右平行を成す。墓葬形制は前記墓 114 形制と基本的には同じである。形の跡を観察すると後室は或いは 又磚のアーチであったか、ただ盗掘にあって以後破壊が甚だ激しく、墓磚が奪い去られた疑いもある。死者の埋葬は元漆棺が用いられており、室内には漆皮、棺釘、白灰が尚存するが、ただ粉々に乱されており、葬式、方向を識別することは難しい。墓は A,B 二室相通じて使われたに違いない。両墓は東西に 7,8m 隔たっているとは言えども、二墓の耳室の中間に、B 室より A 室へ向かって寛さ 0,8、高さ 1,02m の甬道を穿っているが、ただお互いの距離が相当隔たっているので、両墓が相接する処が都合よく揃うのは難しく、甬道が A 墓に接近した時始めて発覚し、A 墓耳室に僅かに折れて入り込んでいる。B 墓開鑿が A 墓より遅いと知ることが出来る。この事から A 墓は墓葬形制中の三型一式に属する。此の種の現象は、墓 1009A,B の "隔山葬"に現れた二式と全く同じく、一式より遅れて現れる。A,B 共編年は第四期。

D, 第四型墓葬 (磚室雙穹窿と土壙抛物線頂墓)

例十二 雙穹窿頂磚室墓

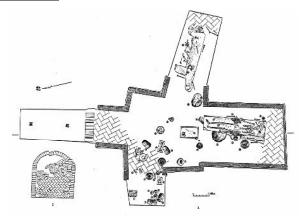


図21甲 1029 号墓 1、平面図 2、封門磚正視図

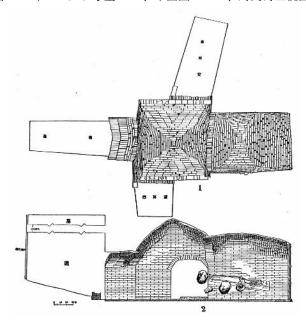


図21乙 1029 号墓 1、墓室上蓋図 2、東断面図

墓 1029 は "丙二"区の東部、東へ三号溝より 70m 隔たる所に在る。墓道は長方竪井で開口は長 2,40、寛 1、深 7,38m、門は北東へ 10 度偏り、その前に未だ開かれていない階段形の墓道があり、前とこの各型墓葬は同じである。墓門の内、一段甬道を通過すると墓室に到着する。墓室は全て磚の積み上げから成っている。平面の整然とした前堂と後室の配置を看ると、第三型墓葬の形式の完全採用を殆ど終えるが、僅かな違いはただ前堂後部が内向きに収縮し、終には後室の寛さに接近する方向に向かう。これは或いはこの墓頂構造の影響を受け、第三型をやや簡略化することに関わっている。墓室前堂上部の構造は、第三型墓葬の単穹窿と同じ形を同様に使用し(図版 8、5、6)、墓室の前後は一個の雙穹窿の墓頂と成り、この点は第四型墓葬中、最も典型的な構造となっている。編年は第五期。

第四型墓葬

例十三 抛物線頂土壙墓—初平元年墓

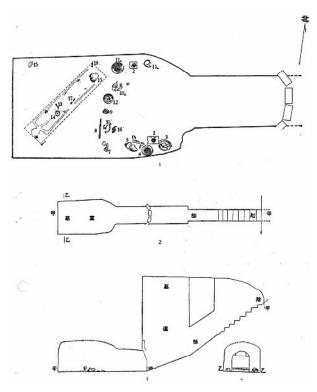


図 2 2 147 号墓 1、墓室平面図 2、平面図 3、北縦断面図 4、墓室東横断面図

墓147 は第二校区北に偏り、"乙四"区の南部に出た。その南は第三型墓葬群から為り、二号溝の西に近接し、墓道前端は溝に沿って約2,3m 破壊し落ち込んでいる。この他は大部分完全に整い保存されている。墓前は長方竪井墓道で、再び斜めの長い階段が付いている。竪井は長さ2,78、寛1、最深5,6m、階段の後半は八級残存している。階段の水平長は6m(復元尺寸)、階段の下は竪井を通過し洞に達し止っている一段の傾斜で、傾斜長は約7,6、寛0,6、深さ4,6mで、墓門の地面に較べ少し高く、約23度傾斜し、入室の後は水平に転じている。墓門は東南へ6度偏っている。墓門の外は封門磚が積み上げられ、平面は弧を成して並べられ、封門磚は分類の第八式に属す。墓室は土壙。墓門の上は弧頂に開成し、土壙で出来ている。寛1、高さ1,19m。その内1,48mの長さの甬道。甬道内出入り口は、やや高く1,8m。墓室平面はやや長方形で、甬道に接近する前端部分は次第に狭められ、又第四型墓中常に形制を成す。墓室の最長は3,55、最寛は2,05、高さは1,8m。棺木は墓室後部に斜めに置かれていた。棺木は既に損壊し、白灰が一層残され、白灰性質は1029墓中に有ったのと同じであり、長さ1,88、寛0,44~0,46m、厚さ6~8mmで等しくない。灰の周辺は四面極めて均等でつるつるし、ついでに当時棺木内部は木理が有った痕跡を残している。人は白灰の上の台に置かれ、人頭は西南に偏っている。編年は第六期。

E, 第五型墓葬(前堂横列墓)

1) 五型一式

例十四 横列堂土壙墓

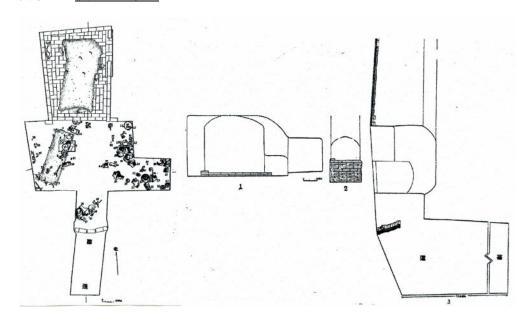


図 2 3 1030 号墓 平面図 1、墓室北横断面図 2、墓門展開図 3、東縦断面図

墓 1030 は、"丙三"区の東南部、三号溝の西、第四型墓中の墓 1029、1033 の左右に連 なる隣に出た。墓道は依然として、長方竪井で、上の口の長さ2,5、下の口の長さ2,7m 底端は上端よりやや大きく、寛 1m、深さ 7,24~8,2m、墓道の底は前が高く後ろが低く 傾斜約23度である。墓門は南西に6度偏る。甬道の内、開かれた平面は長方の前堂、前 堂横列、墓道方向と垂直である。前堂平面は東西長さ 3,55、南北の奥行き 2,45m、高さ は西端 2,18、東端 1,40m、墓頂は前堂西壁と垂直に接し、東は放物線下降を成し、もっ て前堂左側の耳室に接する。北壁の真ん中に雙棺後室が開成され、後室は弧頂をなす。 後室平面の長さ 3,08、寛 1,87~2,06m、高さは前室と等しく、地面の舗磚は一層で、舗 地磚紋は十一式を用いる。全室整っているところを看ると、依然として第三型、第四型の 前堂を採用し拡大させている。此の種の動向の原因、或いは直接墓頂構造の発展による出 現は(例十五、墓1027参照)、同一ではなく、下節分類中にも有るが、第三型、四型と 第五型の主要な区別と為っている。その平面形式は明らかに、直接第三型平面を踏襲し、 頂線の開鑿は第四型後室から出処(例十二、墓 1029); その脈絡は墓 1027 墓頂構造中に 猶明らかに尋ね得る(例十五参照)。墓は早期に盗乱に遭い死者の葬式を識別する手掛か りも無く、頭骨が二つ後室の東壁の下に見出せる。灰の痕を調べると二棺は又前堂と後室 と分かれているが、ただ前室の棺の下には元の位置に有ったか否かは分からないが器物が すこぶる多く、棺木が有ったであろう処には一層の白灰を留めている。編年は第五期。

2) 五型二式

例十五 横前堂磚室墓

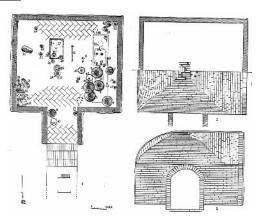


図 2 4 甲 1027 号墓 1、墓室平面図 2、墓室俯視図 3、墓室前側展開図

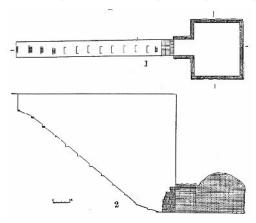


図 2 4 乙 1027 号墓 1、平面図 2、甬道断面と墓室西壁

墓 1027 は、"乙三"区最西部、三号溝の東に極めて近く、三号溝はこの東南、西北方向にあり、墓 1030 が北西にある、三型墓 1026 と隣り合わせにある。スロープ式墓道、門前に長方竪井は用いてなく、墓道は広さが加わり、埋葬時の棺路を成していた。墓道の長さは 10,04、寛さ 1,10、深さ 7,2m。坂面は上より下まで 13 の窪んだ足場があり、依然として階段の作用を有している(図 2 4、乙)。門は 3 層の磚で封じられ、積み方は第四式を用いている。門内は長さ 1,04m の甬道をとどめ、甬道は弧頂である。墓門の両側は磚で積み上げられ、その上のアーチは小磚が横に4列並んでいる。門は北東に4度偏っている。墓室平面は長方に開成、東西長さ 3,20、南北の奥行き 2,80m、概略墓 1030 の前堂と同じである。墓頂の造り方は東半分に穹窿構造が用いられ、アーチ面東段は少し斜面を成していて、見るところ穹窿頂面と同じである;西段は墓室西壁との距離が比較的遠く、アーチ面の構造は斜面を用いず、これより直線を成して立ち上がり、墓室の西壁の上で垂直に交わる。此の種の建築手法は、既に墓 1029 の棺室後端での採用を見、ここに到って益々の成熟を見る。<後略> 編年は第五期~六期。

2) 五型二式

例十六 横前堂土壙墓

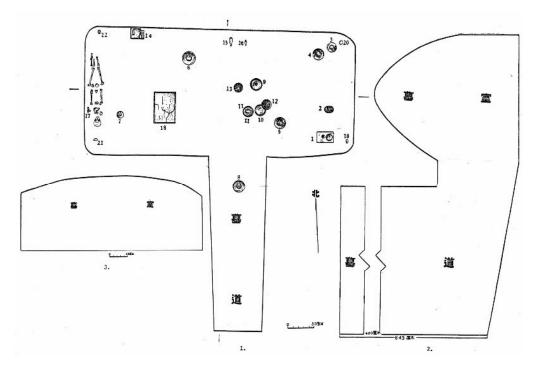


図25 143 号墓 1、平面図 2、西縦断面図 3、墓室北横断面図

墓143 は、"乙四"区南部、二号溝の西63mの所に在り、墓144の極近い隣に出た。 長方竪井墓道で、墓道の長さ2,8、寛さ1、長さ6,45~6,91m、底の面は傾斜していて、 坂面の前端は墓門に較べ0,46m高い。墓室の中間に甬道が有り、甬道の長さ0,5m、寛さ 1,10、高さ1,5mである。その前端は墓門で、墓門の方向は南西に3度偏っている。 墓室は長方土壙を為し、横堂と墓道は垂直、墓1027の様だが、長さの度合いは大きい。 長さ5,07、寛さ2,4m、室の中のアーチの高さは2,07m。墓室の左右両壁は、均しく墓頂 中間に較べ低く(高さ1,6m)、墓室天井線の東西両端は次第に垂れ下がり、両壁と接し、 断面観察によれば(図25、3)、天井の線の両端は均しく放物線弧となり、やや単穹窿 頂面の二つの傾斜面の如く、天井の長方形だけが前例と同じく、第三型墓の天井の発展の 影響を受けているが、ただ此処ではまだ磚室は発見されていない。平面は上述1027墓と 同型だが二者には頂線にやや同じでないものが有る。棺木は一口、墓室右壁下に安置され、 死者の頭は南、足は北に、手足は伸ばして葬むられ、棺釘、白灰は用いられていない。 編年は第六期。

2) 五型二式

例十七 横前堂雙後室磚券墓

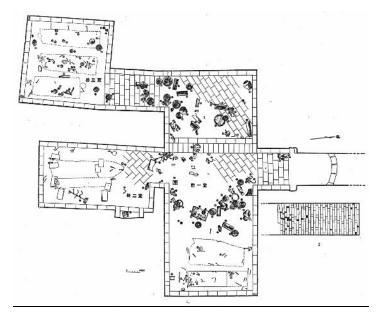


図 2 6 甲 1035 号墓 1、墓室平面図 2、封門磚展開図

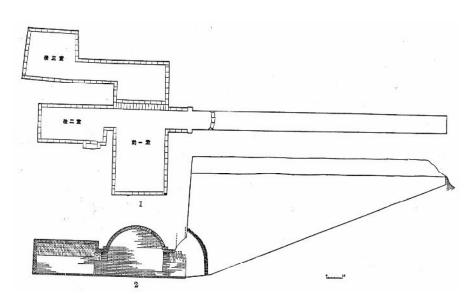


図 2 6 乙 1035 号墓 1、平面図 2、西縦断面図

墓 1035 は、"丙二"区北部から出、発掘は前後 24 日かかった。今回の発掘の中で大型の 墓葬の一つだからである。スロープの墓道長さは 16,98、寛さ 1,16、深さ 7,6m。 墓道の門近くで平坦に変わり、門の外は一層の小磚を積み上げ封じられ、その上端は早い 時期打ち破られ盗穴となっている。墓門は北東へ 4 度偏る。 甬道の長さ 1,38、寛さ 1,7、高さ 1,52m。門内は依然として東西横列の東西前堂で、東西長さ 7,75、寛さ 3,06、高さ 2,90m、前堂の左半の地面は右半に較べ 0,28m 高く(磚三つ分)、前堂を東西両部等分に使っている。横堂の後は、二つの後室(後二室、後三室)を平行して開成し、後室と前堂が接する処に甬道がある。二室甬道は、墓門と向かい合っている。長さ 0,73m。三室甬道は、前室の右壁に連なり接している。長さ 2,4m。

後室の地面は、各々その門前の前堂の地面高さに等しい。後二室は平面が長方形で、長さ3,92、寛さ2,06、高さ1,9m。後三室の平面はやや正方形を成し、長さ2,85、寛さ2,84、高さ2,35mである。後二室の右壁前端に仮耳室が一つ開けられているが、内に向かっては未開鑿で、僅かに耳室の形をしているのみである。墓室は全部磚で造り上げられており、磚も又一般墓葬のものに較べ大きい。墓壁は依然として前型各墓と概略同じで、磚を積み上げ、墓の天井は(甬道も一緒に)、全部"横券"構造を採用(図版十、2,3.5)、故に天井のラインは地面に平行。地面に敷き詰められた磚を根拠にすると各室の平面は同じでなく、第四、八、九各式を区別し採用している。墓中には棺が6つ葬られている。

人骨は盗掘にあい、既に本来の位置を失っており、落ちている棺の白灰跡の観察に基づく と、後二室の中には棺一つ、後三室には3棺、前堂右端に2棺葬られている。各棺は皆棺 釘を用いており、棺下には落ちた白灰が一層敷きつめられている。編年は第六期。

2) 五型二式

例十八 横前堂雙後室土壙墓 一建寧三年墓

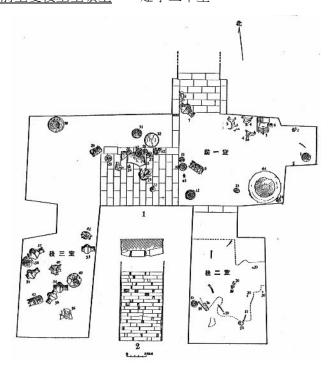


図27甲 1037 号墓 1、墓室平面図 2、封門俯瞰図

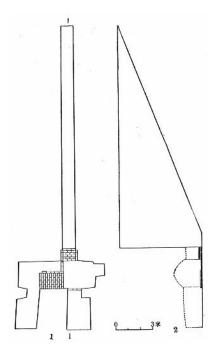


図27乙 1037 号墓 1、平面図 2、西縦断面図

墓1037は、"丙二"区西部から出、墓1038、1039と最西部での三墓葬の一つである。 スロープ式墓道は、坂の長さ19,3、寛さ1,10、深さ7,5m、坂面は25度傾斜している。 墓門は約前室の中央に開いており、北東に4度偏っている。門内の甬道長さは0,7、寛さ1,07m。内に入ると広くて大きい前堂となっていて、前堂は東西長さ6,7、寛さ2,36m。前堂の左半は磚の台が築かれていて、台の高さは地面より三磚、ただ台の前は墓門に及ばず、右面は西壁に及ばず、墓1035とやや違っている。前室の後ろ、東西二つの後室(後二室、後三室)が開かれ、二室の前は均しく甬道がある。後二室の甬道長さは0,8、寛さ1,14m;室長2,76、寛1,9~2,05m。後三室の甬道長さは0,76、寛1,12m;室長2,7、寛1,88mである。前室右端、耳室が一つ開かれているが範囲は極めて小、僅かに長さ0,8、寛1,04m、既に耳室の働きは失っている。墓室は土壙。僅かに墓門と前室高台が磚で築かれる。磚の形の大小は墓1035と同じ。四壁は白灰で全体を塗られている。上の天井は既に落ち込み墓頂形式は不明。但し平面より推測すると、墓1035と同型と思われる。後二室には、白灰及び棺釘が発見され、灰の中に雑然と人骨が重なり、早くに盗掘者のより乱されている。後三室は未だ人骨は見られず、又灰があった痕跡も無い。編年は第六期。

参考1~各期土壙墓比率

第一期 23/57(47%)・第二期 27/86(31%)・第三期 前室 28/42(66%) 後室 12/42(28%) 第四期 前室 18/23(78%) 後室 11/23(48%) 第五期 前室 8/13(61%) 後室 3/13(23%) 参考 2 ~各期磚築墓比率

第一期・第二期・第三期前室 0 第三期 後室 12/42(28%) 第四期 前後室共 1/23(1%) 第五期 前後室共 4/13(30%)

4) **墓葬型式の推移** (表 C-1A 参照)

『新中国の考古学』・[註5]に依ると、洛陽漢墓編年第2期中第1型墓にあたる焼溝漢墓の 第1期・第2期の1型1式墓(単棺空心磚墓と単棺平頂洞室墓)は、およそ武帝の元狩 5(紀元前118)年より武帝末期あるいは昭帝時期迄と述べている。表 A-1A、表 C-1A を見る限り、宣帝時期まで造られているが、単棺空心磚墓はその後もなお残存するとして いるので、作表の通り焼溝漢墓の編年第2期の下限を宣帝・元帝間としても良いかと思う。 それは貨銭の出土状況から、第1期は武帝時代の五銖銭を持っているので武帝・昭帝の時 代であり、第2期は宣帝・元帝時代の五銖銭を持っていることからも頷ける。

I型2式墓(両次造雙棺空心磚墓)を単棺墓から雙棺墓へと推移する過渡的形式と解釈しているが、単棺墓も両次造雙棺墓(並穴合葬)も又、雙棺墓(同穴合葬)にしても1期にも2期にも存在しているので、過渡的形式と言うよりあくまで埋葬側の都合に依るものと考えられる。但し造墓当初から夫婦同穴合葬を意識した I型3式墓(雙棺墓)の出現は、両次造雙棺墓形式の発想から生まれたものと思われる。時期は武帝末期頃であろうか。洛陽漢墓編年第2期中第2型墓にあたる I型2式墓(両次造雙棺空心磚墓)、 I型3式墓(雙棺空心磚墓)の終焉を共に宣帝時期前後としているが、 I型3式墓はその後も第3期後期、即ち"新・後漢初期"時代まで続いている。

焼溝漢墓の第3期前期(前漢後期)は洛陽漢墓編年第3期にあたる。乙区が中心墓区となりⅡ型1式墓(直線弧頂小磚墓)が60%で主流を占め、Ⅱ型2式墓(曲線弧頂小磚墓)が19%、約5%(4基)のⅠ型3式墓が前代から引き続き造営され、新しくⅢ型1式墓(縦穴墓道単穹窿頂墓)が出現して来る。時期は前漢後期とされているが、後期後半の範囲ではないかと思う。この期が全期間中最も多く造墓されており焼溝の地での最盛期と言える。焼溝漢墓の第3期後期(新・後漢初期)は洛陽漢墓編年第4期にあたるが、Ⅱ型2式墓が主流を占め、続いてⅡ型1式墓とⅢ型1式墓が同程度、Ⅰ型3式墓が1基だがこの時期迄存在している。

焼溝漢墓の**第4期(後漢前期)**は洛陽漢墓編年第5期にあたるが、**Ⅲ型1式墓**(縦穴墓 道単穹窿頂墓)が主流となり**Ⅲ型2式墓**(縦穴階段道単穹窿頂墓)・**Ⅳ型墓**(雙穹窿頂磚室 墓)が出現する反面、この期を最後にⅡ型1式墓・Ⅱ型2式墓が終焉する。

焼溝漢墓の第5期(後漢中期)は洛陽漢墓編年第6期に相当する。Ⅲ型2式墓・Ⅳ型墓が主流となり、**Ⅴ型1式墓**(前堂横列墓)が出現するが、この期でⅢ型1式墓・Ⅲ型2式墓・ Ⅴ型1式墓は終焉を迎える。この期の終末に**Ⅴ型2式墓**(横前堂墓)が出現する。

焼溝漢墓の第6期(後漢後期)は洛陽漢墓編年第7期に相当する。V型2式墓が主流でありIV型墓が引き続き造墓されているが、第5期からこの地での造墓数は減少していく。『新中国の考古学』・[註5]に依ると、「宣帝・元帝時期から始まったⅡ型の小磚墓は、埋葬用具に棺はあるが槨がなく伝統的棺槨制度はここに至って廃止されたと言える」と記しているが、報告書にはⅠ型墓葬でも木棺の痕跡はあるが、木槨は見つかっていないとされている。

Ⅱ型以降の葬具には木棺の記載は無く、単に棺か棺・棺釘、またはそれに白灰と記されている。 中原地域の前漢前期に木槨墓が多少あったとしても、中期に始まる焼溝漢墓では既に廃されていたと考えられる。

焼溝漢墓では、秦漢時代の主要な墓型式である木槨墓、木室墓、洞室墓、崖墓、空心磚墓、磚室墓、石室墓の内、洞室墓、空心磚墓、磚室墓が殆どを占めている。特に墓域開始時の前漢中期では洞室墓が多く、また洞室の中に空心磚を組み立てた空心磚墓が多く見受けられる。前漢中期に関中や中原地域で流行し始める磚室墓は、焼溝漢墓では少し遅れて登場しているが、後期には一般的な墓型式となり、天井はドーム式かアーチ式が多くなる。後漢後期になると多数の部屋を連ねた磚室墓も現れるが、全体的には墓室は土壙が多い。

実年代	BC							BCAD											. Al
	219	206 195 180	157 141 132					33 7 1			40	57	75	88	106	125	146 155	168	189 22
中国時代区分	秦			前漢					新						後	漢			
		前期		中期		1	後 期				前	期			中	期		後	期
皇帝名	始皇	高祖 惠帝 文帝	景帝	武帝	昭帝 宣帝	元帝	成帝	哀平	王莽		光武帝	明帝	章帝	和帝	殤·安帝	順帝·	桓帝	靈帝	献帝
漢鏡 岡村編年		第1期	第2期		第3期			第4期			1	第5期				第6期	years the second		第7期
広州漢墓 編年		L期 前半	1期 後半		2期		3期			Г	4男								
広州漢墓 時代区分	莱	嶺南·南越王国前期	南越王国後期	Ņ.	前漢中期		Ŕ	前漢末・新	i	I	後漢前	前期				Ü	美漢後期		
焼溝漢墓 編年			期前	第1期	第2期		第3期前	期	第3其	朝後	頻	第4期			第5	期		第6	期
焼溝漢墓 時代区分				前	漢中期		前漢後	栁	新·爸	多漢	初	後漢前斯	1		後漢	中期		後漢	後期
墓葬型式				Secretary Company			-			1	墓 数·編	年							: 小 計
I型1式					:														
単棺平頂洞室墓				18 7	16								~~~						41
I 型2式																			
两次造双棺空心磚墓				2	1														3
I 型3式				(4.000)	:							3							T
双棺空心磚墓					6	1	4	oueness.			1								13
Ⅱ型1式																			
直線弧頂小磚墓							34	10	5	5		1							50
Ⅱ型2式		NEW YORK WILLIAM TO THE TOTAL OF THE TOTAL O													_				
曲線弧頂小磷萬					:		7	7	13		7	1	1						36
Ⅲ型1式													upon tak						
竪穴墓道単穹窿頂							2	7	4		4	6	5		2				30
Ⅲ型2式																			
竪穴階段道単穹窿頂												4	2		4				10
IV型																			
双穹窿頂碍室墓												5	9		4		1	4	23
V型1式																			
前堂横列墓															2	Y-12-12-12-12-12-12-12-12-12-12-12-12-12-			2
V型2式																			
横前堂墓																	1	10	11
?(型式不明)								3			1	1	1						6
各期合計				18 10	23	1	47	27	22		13	18	18		12		2	14	225

表 C-1A 墓葬型式·墓数 編年表

以上(その1-2)として焼溝漢墓報告書中墓区、墓型式、墓葬分布等墓の実態について述べてきたが、次に(その1-3)として副葬されている銅鏡等について報告書の概略の翻訳からその実態を述べ、次に(その2-1)で広州漢墓について、さらに(その3-1)から銅鏡に関わる考察と、両地域の相違について考察する予定である。

出典・参考文献

[註1]	洛陽焼溝漢墓	報告書	中国科学	学院考证	古研究所	中国科	学院印刷廠	1959
[註 5]	新中国の考古学	2	中国社会	科学院	完考古研究所	斤編著	平凡社	1988
[註8]	中国の諸都市ー	その生レ	立ちと現	状ー	陳橋驛編	訳馬安東	大明堂	1990
[註 22]	洛陽西郊漢墓発	掘報告	考古学報	Ž		文物出	版社	1963
[註 24]	中国古代の城郭	都市と地	地域支配	五井區	直弘	名著刊	行会	2002